

東海地方における秘事法門について

菊池 武

古来真宗に於ける異端とされる「秘事法門」なる宗教的秘密結社の残存は現今に於ても猶著しく、特に真宗地帯と云われている所に潜在的に広く分布して、その数は次第に殖える傾向にある。顧みるに、異安心と異義に就いての論考も今迄に多々あるが、然しそれは単に一真宗の教団史・教理史上の次元でだけ論じられていて、聊か普遍妥当性を欠く様に思われる。此の問題は日本宗教史の一裏面史であると共に、民族宗教の根本に触れる問題でもあり、社会史的・民俗学的・宗教心理学的面での広い考察が必要とならう。そこで今回は、比較的秘事法門の古い原型を残していると思われる東海地方に現実活動している一例を取り上げ、その儀礼を中心として若干の考察を試みてみたい。

さて此の秘事法門の法座は、特定の場所を定めず信者の家を順番に回つていて、その日数も昔は数日に渡つた様ではあるが、時代と共に次第に簡略化され一日で済ませてしまう。そして此の法座の開かれる時、毎回三十人前後の受信者（行者）があり、彼等の年齢も広い層に渡つている。此の受信の勧誘も、縁者・友人・近所関係を辿つて秘密裡に伝播され、他よりこれを知る事は非常に困難であり、特に寺院・僧侶に対しては最も警戒的で批判的である。そして此の様な結社には、必ず一人の俗知識（俗人）なる頭梁が居る。此の俗知

識達は法然より三十四代目とか、親鸞より三十三代目等の次第相承の善知識であると自らの法脈を説き、釈迦の代りをするのであると云う。その上法門に表裏があり、寺院・僧侶の法門は表ではあるが仮のもので、我々の裏の法門にこそ真実の教えがあると称する。信者達も彼を一人の求道者的存在として敬信し、絶対に帰依する。これが更に進むと、原始社会の「人神」的觀念の反映と見られる知識即仏（神）とする知識帰命に發展し、所謂知識以外には仏も神も拝せずとする「不拝秘事」となる。猶一般に此の様な秘事法門の組織は、古い封鎖的な村落共同体社会の集団組織の地盤と融合しながら継承して来たものであろうが、しかしそれは現今次第に此の秘事の様に、広い地域に渡つて信者の分布を見る様になる。

そこで法座の開かれる部屋の前には阿弥陀三尊を掛け、両側に選択集十章の図・当麻曼荼羅・十界図・法然像が並び、仮設祭壇には仏足跡図・楯・ローソク・小餅・香炉・燈明・仏飯・壺・法然傳來と称する巻物等が置かれる。そしてその前で俗知識は此の部屋に諸神諸仏を招引し、悪鬼不浄を防ぎ願土となさんとして呪文を唱えるが、これは此所を一つの結界した場所とするのであろう。其処で愈々一生に一度の大事な儀式（加入儀礼）と称する「一念帰命」のお授けが始まると、俗知識と補佐役の六人の導師達は其々白装束となつて、各部署に着く。そして窓のカーテンを引いて密室に似せ、行者は脇息を境に火定三昧に入つている俗知識の前に二人の導師に挟まれて閉眼して坐る。彼は秘事法門に能く見られる真言の金剛合掌を結んだ手に数珠を掛け、両側の導師の手助けの元に十念を唱え終ると同時に、脇息に額を勢よく二・三度打ち突ける。その時に俗知識は、ローソクを行者の顔に近付けながら「よし」の掛声と

共に仏の光明を見たとしてローソクを振り消し、往生決定の判定を下す。そして両側の導師が信者の耳に口を近付け十念を吹き込む。此所に於て今「即身成仏」をしたとし、功德の日暮が出来、現世に利益があると云う。此の儀式には浄土宗の五重相伝に於ける逆修の影響が見られるが、それは一つの密室の中で額突をして、地獄の責苦を受ける事によつて、清浄な生命に生れ変るという日本古来からの一種の擬死再生儀礼を意味するものと考えられる。さて此の後介添の導師に引き起され、水杯を受ける所迄手引かれるが、これは昔日隠をしていた頃の名残であろう。此の水杯は前に俗知識が含嗽をした残水で、式の終る毎に飲まされるが、それは行者達の使用する教珠に俗知識が息を吹き付けるのと同様、釈迦の代官である俗知識と一身同体となる事、即ち結縁を意味するものと思われる。そして此の日を往生決定した往生日として一生記憶して、精進潔斎する様に云い、又蓮如の「御文」の掟を引証して打ち突きをした事、光明を見た事等は部外者には絶対云つてはならぬと申し渡される。それは内心に貯えて陰で喜ぶのであつて、これが所謂真諦門であると云う。こゝに至つて密室に於ける儀礼はより秘密性を増して来る事になる。更に此の時、解散時に配る餅・櫛・水・油等は傷・水中・腹痛・その他の万病に能く利くという現世利益を説く。それから今は省略されているが此の式後に、如来様と三三九度の杯をし饗宴を開く事があると云う。此所に於て往生決定し、仏になつた新しい仲間が入つて来た事を喜び、心新たにお互いの結束を誓ひ合い交際が始まるのであろうが、これは即ち古代の同族宴樂に於ける共同飲食(直会)の投影と思われる。所で猶此の加入儀礼で注目さるべき事は、嬰兒が母親の膝に抱かれて健に育つ様にと「御縁」を授かる事、

東海地方における秘事法門について(菊池)

末だ固まつていない五・六才の幼児が「お授け」を受ければ一番その功德が大きいと云う事である。これは人の成長に伴なり諸段階に依じて行われる古代以来の通過儀礼の断片の名残であろう。次にその他の主な儀礼では、功德の念仏の儀式と称し太陽を拝して十念を唱える。これを「日想観」と云つて即身成仏したから太陽を見ても眩しくない、太陽の中にも仏の在るのが見える様になると云う。此の様な日想観は多くの秘事法門の例に見られるが、大日如来と弥陀(真言と浄土)の合体で、所謂自ら大日如来と一体になるといふ論理で、庶民の間に広く浸透していた真言密教に於ける「大日如来」の信仰との関係が強く窺われる。又次に千輪相の念仏の儀式として、俗知識が行者の足の裏に息を吹き付け、釘が刺さつても蝮に噛まれても無事であるとし、次の得脱の念仏に於ても俗知識が信者の顔に息を吹き付け、死に際しては身体は硬直せず、柔らかく仏顔の状態になるとする現世利益的な事を説くのである。猶此所で注目される一連のマジカル的な息吹き現象は、息即阿弥陀仏とする真言密教の觀念が入つて来ていると思われる。それから又一年に一度火を消す事の出来る火伏の儀式を行い、呪術的な極意を授ける事もある。

以上の如く、此の秘事法門に於ては浄土宗・真言密教等の影響が強く窺われ、表面は真宗・浄土宗の教理的解釈を以て理論化してはいるが、古い社会構造の伝統に根差した多神教的・呪術的・現世の様々な民俗信仰と儀礼の残存が顕著に見られるのである。これは次第に抽象的に觀念化して行く仏教というものが、具体的に体験的な日本の固有信仰とどの様な関り合いを持つて次第に庶民大衆に受け入れられて行つたかを知る上での一つの手懸となるであろう。

参考文献五来重教授「かくし念仏と通過儀礼」(真宗研究11輯)